

教 育 長 様

代表者 校園名：大阪市立本田小学校

公印

校園長名：錢本 三千宏

電話：6581-1531 FAX：6581-3194

申請者校園名：大阪市立本田小学校

職名・名前：首席教諭 流田 賢一

電話：6581-1531 FAX：6581-3194

代表者校園 事務職員名：大谷 由香

平成 28 年度 「がんばる先生支援」個人・グループ研究 申請書

◇ 本研究の支援を受けたく、次のとおり申請します。

1 研究コース：

個人研究コース ・ グループ研究Aコース ・ グループ研究Bコース

継続研究： 繼續研究（2年目 ・ 3年目 ・ 4年目）

2 研究テーマ

「世界トップレベルの学力・人間力強化」をめざして

◆ 研究内容のキーワード：

アクティブラーニング 協働学習 コミュニケーション コラボレーション
世界トップレベルの学力・人間力 新しい能力観 21世紀型学力 ICTを活用 学習意欲向上

3 研究目的：

- 新しい能力観に対応できる児童の育成
- 21世紀型学力を身につけるための学習内容・方法の探究。
- 自ら学ぶ意欲や学ぶ手法を獲得する児童の育成
- 教科指導力を向上し、アクティブラーニングなどの新しい教育方法の推進
- ICTの活用による授業での知識活用場面の充実
- 先進研究校の公開授業・講演会を企画・運営し、大阪市全体へ拡大

4 研究内容：

2年間の「がんばる先生支援」研修助成を受け、本校の児童をテーマのように「学力」と「人間力」強化に向かっての育成が進んできたと言える。児童は、落ち着いて学習に取り組み、全国学力・学習状況調査やCRT（数研式標準学力検査）に結果でも国語科・算数科ともに全国平均を上回っている。（昨年度は初めて平均を下回った）また、児童への「学校生活アンケート」（本校実施）では、**学校生活に対する肯定的な意見**が向上している。保護者への「学校評価アンケート」では、児童の学校生活に対する満足感や学校への信頼は増し、学校教育活動への理解が進んだと考えることができる結果が出ている。これは、教職員の不断の研修の成果により授業構成を変化させたことの結果であろう。「プレゼンテーション」「対話・討論」「観察・実験」を重視した授業を実施し、教員研究会を実施してきた。**研究のパラダイム作り**のため、先進的研究校への視察や講師を招聘しての研究会を実施しすることができた。本校は、ICT先進的研究校として教科教育に力を入れてきた。情報化社会の中で、学校教育に情報機器を活用した効果的な学びを提案してきた。

本校の現状と課題、大阪市教育振興基本計画を踏まえ、日本経済団体連合会「21世紀を生き抜く次世代育成のための提言」（※1）やノーベル経済学を受賞したジェームス・ヘックマン教授の「社会で活躍するためのBIG5」（※2）を生かした研究を続ける。また、Fadel教授が主張する「21世紀型カリキュラム」の「学力」「スキル」だけでなく3つ目の「人間性」を取り入れた3つの力を立体の3つの辺と捉え、調和のとれたバランスのよい成長ともつながる研究の方向性である。そのために、本校児童の**粘り強く学びに向かう姿勢（学力）、21世紀型スキル（スキル）、友達とつながる力（人間性）の育成**を続ける。

今年度は、本研究テーマを深めるために2点について深く研究を進める。**①アクティブラーニングを取り入れた授業②学級づくりと学力・授業の関係**を明らかにする である。前者のターゲットは教師の指導力向上である。**新学習指導要領の重要改革を先行実施**し、児童の主体的・協働的な学びを研究し提案する。児童の学習意欲向上につながり、知識・理解の習得（何を知っているか）からコミュニケーションし、考え探求する姿（知っていることをどう使うか）へと成長させる。他者と関わり合いながら、学びを深めるため思いやりがあり、バランスのとれた姿（どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか）をまとめる。後者の学級づくりと学力・授業の関係は、前者の成果に焦点をあてアンケートにより調査することである。アクティブラーニング授業評価（教員）、自己評価（児童）（※3）を実施する。

研究のPDCAサイクルを1年間のスパンで捉えるだけでなく、学期ごとや研究会に向けてなど、小刻みに回し、検証を加えながら進めていく。今年度も研究先進校から講師を招聘し研究会を開催する。本校の研究が大阪市のスタンダードモデルとなり、全市に広げていく。

※1 「21世紀を生き抜く次世代育成のための提言」とは、学力だけに偏った児童の育成ではなく、人間性の育成（志と心）・困難を克服しながら目標達成する力（行動力）・深くものごとを探究し考え抜く力（知力）をバランスよく育成すること。

※2 「社会で活躍するためのBIG5」の中で、周りの人に合わせて人間関係を構築できる（協調性）・今までの経験に固執せず、新しい経験や知識を追い求める（経験の開放性）は協働した学びには不可欠である。

※3 早稲田大学教職大学院 田中博之教授の調査 参考文献「アクティブ・ラーニング実践の手引き」

5 活動計画 :

| | | |
|------|-----------------------|--------------------------------------|
| PP | 6月17日 | 校内研究会 理論研修会アクティブラーニングとは |
| D ★ | 6月27日 | 元筑波大学附属小学校教諭（国語）を招聘し公開研究授業・研究会 |
| CA | 7月15日 | 一学期の取り組み報告・理論研修会 |
| D ☆ | 7月17日 18日 | オール筑波算数サマーフェスティバル |
| D ☆ | 7月21日 | 国語授業づくりセミナー |
| DC | 7月25日 | 元筑波大学附属小学校教諭（国語）を招聘し、授業づくり研修会・指導案検討会 |
| D ☆ | 7月29日 | 算数授業ICT研究全国大会 |
| D ☆ | 7月30日 | 使える授業ベーシック研究会 |
| D ☆ | 8月4日 5日 | 全国国語授業研究大会 |
| D ☆ | 8月6日 7日 | 全国算数授業研究会 |
| CA | 8月26日 | 報告会並びに教科研修会（国語・算数）・指導案検討会 |
| PA | 8月29日 | 二学期に向けての授業づくり研修会・理論研修会 |
| D ★ | 10月 3日 | 先進校（国語）を招聘し、校内研究会・公開授業・講演会 |
| DC ★ | 10月 17日 | 筑波大学附属小学校教諭（算数）を招聘し、校内研究会・公開授業・講演会 |
| D ☆ | 11月 20日 | ICT活用先進校の授業見学 |
| C | 1月 18日 | 指導者・児童にアンケート実施、インタビュー調査 |
| A | 1月 25日 | 区教員研究発表会 |
| A | 1月 30日 | ICT公開授業、研究の報告 |
| ※ ★ | 公開授業研究会 | ☆管外出張 |
| ※ | 研究会日程は、昨年度実施を参考にしている。 | |

6 見込まれる成果 :

○ 子どもの「生きる力」の向上

困難にあつたときにくじけず対処できる力は社会で生き抜くために必要な力である。個の力で解決するだけでなく、考え方の違う他者と協調し解を見出す力（コミュニケーション・コラボレーション）がはかられる。昨年度取りくんだICTを活用した情報活用能力の育成を踏まえ、その情報を活用できる知識活用能力の育成は、「世界トップレベルの学力・人間力」強化につながる。

○ 教師の指導力の向上

新学習指導要領での重要改革である、アクティブラーニングの視点をいかす授業づくりを研究することにより、授業像が変化する。教師主体の授業から、児童が主体的に協働的に考える授業となる。全国トップレベルの授業を体験・経験することによる教育研究へのインセンティブの向上、全国の研究者との出会いによる研究のストラテジーの獲得、自らの実践的研究による授業方法の改善、ICT活用モデル校研究との連動により教科の本質に迫る。ICT活用の方法等により、本研究に参加した教師の指導力は向上する。複数回の公開授業・研究会により、大阪市の教員の指導力の向上につながり、大阪市のモデルとなる研究となる。（※4）早稲田大学教職大学院 田中博之教授の調査 参考文献「アクティブラーニング実践の手引き」

7 成果の検証方法 :

○ 本校の公開授業と筑波大学附属小学校等による公開授業・講演会による参加者1000名をめざす

年度のスタート時期の早い段階でモデルを示すことは求められていると考えるため、公開授業・研究会を1学期に予定している。また、先進校の教員を招聘しての公開授業・講演会は今年度も多くの教員に参加していただき、教科の本質をとらえた児童主体の授業について研究会を設定する。

○ アクティブラーニング 授業評価チェックリスト（※4）

授業者が、アクティブラーニングを実施するにあたって重要視する視点を早稲田大学の田中先生の先行研究から学び、本田小学校で整理しアンケートによる検証をする。「3. 少しあてはまる」「4. とてもあてはまる」に該当する項目が70%以上になるようにする。

○ アクティブラーニング 自己評価アンケート（※4）

「主体力」「協働力」「創造力」「決定力」「解決力」など、アクティブラーニングを進めるために必要となる力を児童にアンケートによる検証をする。「3. 少しあてはまる」「4. とてもあてはまる」に該当する項目が70%以上になるようにする。

○ カリキュラム改革

本研究を進めるにあたり、21世紀型学力の育成やICTを活用した協働学習の成果を本校研究のカリキュラム改革の10の柱で検証する。10の柱とは、「学びの幅を広げる」「一人一人が考える主体である」「主体同士をネットワークでつなぐ」「豊富な実践例を共有する」「一体化した改革を行う」「学びのための豊かな文脈をつくる」「問い合わせをはっきりさせる」「学習者の姿として仮説を明確にする」「責めるだけでなく、伸ばすために評価する」「指導と評価の距離を近づける」である。

8 研究発表の日程・場所(予定)

| | | |
|----------------|----------|-----------------|
| 日程：平成28年 6月27日 | 場所：本田小学校 | 公開授業・講師師範授業・講演会 |
| 平成28年10月 7日 | 場所：本田小学校 | 公開授業・研究発表会 |
| 平成28年11月16日 | 場所：本田小学校 | 公開授業・研究発表会 |
| 平成29年 1月25日 | 場所：本田小学校 | 区教員研究発表会 |
| 平成29年 1月30日 | 場所：本田小学校 | 公開授業・研究発表会 |

9 代表校園長のコメント

カリキュラム・イノベーションが世界中で起こっている。世界的な動向として、小学校では学問の基礎を学ばせるだけでなく、「社会で学びつづけるための資質・能力」を身に付けさせるという考えが広まっている。一方で、こうした発想に基づくカリキュラムをどのように実現していくかについては、各学校で模索段階にある。本校の「世界トップレベルの学力・人間力の強化」の研究も3年目を迎える。今年の目玉はアクティブラーニングの本格実施である。流田教諭をはじめとする研究メンバーは早稲田大学の田中博之先生をブレインにして、筑波大学付属小学校の教育実践に学びながら研究をしている。大阪のアクティブラーニングのエキスパートモデルになると考える。校長として強く推薦する。